

「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞」訳注（下）

諸田龍美

【凡例】

- 一 「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞」本文の底本には、現在もっとも流布し、かつ詳細な校勘もなされている『唐宋史料筆記叢刊』（孔凡礼点校、中華書局・二〇〇二年）所収本を用いた。
- 二 底本は、付載された孔凡礼氏の「点校説明」によれば、①清・鮑廷博の『知不足齋叢書』所収本を基礎とし、②芸窗書院本、③『稗海』本、④明・鰲峯書院本、⑤清・『四庫全書』文淵閣影印本、⑥傳增湘『藏園羣書題記』卷七「盧抱經校旧鈔本侯鯖録跋」所引の清・盧文弨所藏写本、⑦『永樂大典』卷二七四二、⑧涵芬樓本『說郛』卷三九によって校勘を施したものである。
- 三 二にあげた諸本の他に、⑨『叢書集成初編』文学類、⑩『筆記小説大観』、⑪『全宋詞』にも本文を収めるが、これら①～⑪の諸本によって底本の文字を改めた場合には、逐一これを注記した。但し、②④⑥⑧の諸本については、訳注者は直接これを見ていない。また、⑫愈樾『茶香室叢鈔』卷十七収録本も参照したが、該本は【散文】箇所を省略している。
- 四 底本は、「伝曰」として、当該詞が対象とした『鶯鶯伝』の本文を付載している。これは趙令時の原作を踏襲す

る形式ではあるが、『鶯鶯伝』をほぼそのまま引用しているため煩を避けて省略し、(趙氏の引く)冒頭と末尾の句を提示して、該当する本文の範囲を示すにとどめた。

五 原作の詞には、四の『鶯鶯伝』本文に続けて「奉勞歌伴、再和前聲(歌伴を奉勞し、再び前声に和せ)」という指示が付されている。これは「伴奏者に演奏してもらい、再び前の曲調(商調)に合わせて(歌うように)」との指示かと思われるが、白文を示すのみにとどめた。

六 訳文は平明を旨とした。したがって、原文にはなくても、必要な場合には()を付して意味を補った。

七 前稿「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞」訳注(上)は、『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』第十七号(平成十六年九月)に掲載した。該作の【解題】は前稿を参照されたい。

八 本訳注は、二〇〇三年十月〜二〇〇四年一月に行われた愛媛大学大学院での演習資料を基に、新たに諸田が浄書したものである。この間の演習には次の学生諸君が参加した。

浅川美香

倉本 亮

仙波京子

筒井智美

丸尾のり子

【⑦】『鶯鶯伝』の「是後、又十餘日」から「張生遂西」まで)奉勞歌伴、再和前聲。

一夢行雲還暫阻。盡把深誠、綴作新詩句。幸有青鸞堪密付、良宵從此無虛度。兩意相歡朝又暮。爭奈郎鞭、暫指長安路。最是動人愁怨處。離情盈抱終無語。

一夢の行雲 還た暫らく阻まれ、尽く深誠を把りて、新詩句を綴り作す。幸ひに青鸞の密付するに堪へたる有り、

良宵此れ従り虚しく度る無し。両意 相歡ぶ 朝又た暮。郎鞭の、暫らく長安の路を指すを争奈。最も是れ人を動かすは愁怨の処、離情抱に盈ちて終に語る無し。

【通釈】（鶯鶯との）一夜の夢のような契りは、またしばらく拒まれてしまったので、（張生は）深い恋のまごころをあまさず取りあげて、新しい愛の詩を書き綴った。幸いなことにこっそりとその詩を託せる青い鳥・紅娘がいてくれたので、これ以後は素晴らしい夜を、独りむなく過ごすことはなくなつた。二人の気持ちは相思相愛、明けても暮れても（愛の歡びに満たされていた）。（しかし）ままならぬは仕官のみち、愛しいあの人（張生）が馬に鞭くれ長安へとしばらく旅立つのをどうすることができようか。最も（張生の）心を動かししたのは別れを怨み愁いに沈んだ彼女の姿、別れの辛さが胸に満ちて、最後まで語ることはなかつたのだ。

【語釈】

〔一夢行雲〕：夢のような一夜の契り。楚の懷王が昼寝の夢の中で巫山の神女と契つた故事に拠る。『文選』卷一九、宋玉の「高唐の賦」の序に「昔者先王嘗て高唐に遊び、怠りて昼寝し、夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり。高唐の客と為る。聞く君高唐に遊ぶと。願はくは枕席を薦めん、と。王因つて之を幸す。去るとき辞して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。旦には朝雲と為り、暮には行雨と為りて、朝朝暮暮、陽台の下にあり、と」と。また、『鶯鶯伝』に「（初めて鶯鶯と結ばれた翌朝）張生色を辨じて興き、自ら疑つて曰く、豈に其れ夢ならんか、と」と。

〔青鸞〕：青鳥のこと。西王母のために食を取つたという三本足の鳥。便りをもたらす使者をいう。ここでは紅娘の

こと。【③】の【語釈】を参照。『鶯鶯伝』に「張生会真詩三十韻を賦し、未だ畢らざるに、紅娘適く至る。因つて之に授け崔氏に貽る」と。

〔密付〕…ひそかに託す。こっそりたのむ。

〔良宵從此無虚度〕…『鶯鶯伝』に「鶯鶯は是より復た之（張生）を容る」と。

〔両意相歓朝又暮〕…『鶯鶯伝』に「張生は朝に隠れて（鶯鶯の所を）出で、暮に隠れて入り、同に曩の所謂西

廂に安んずる者、幾んど二月なり」と。『文選』卷十九、宋玉の「高唐の賦」の序に「妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。旦には朝雲と為り、暮には行雨と為りて、朝朝暮暮、陽台の下にあり」と。白居易の「長恨歌」に「蜀江水は碧にして蜀山は青く、聖主朝朝暮暮の情」と。

〔争奈〕…いかんせん。どうすることもできない。

〔動人愁怨処〕…「動人」は、人を感動させる。「愁怨」は、うれえうらむ。『鶯鶯伝』に「何ばくも無く、張生將に

長安に之かんとし、先づ情を以て之を諭す。崔氏宛として難詞無し。然れども愁怨の容は人を動かせり」と。

〔盈抱〕…胸に満ちる。「抱」は、ふところ。胸。

〔終無語〕…『鶯鶯伝』に「張生將に長安に之かんとし、…崔氏宛として難詞無し。…將に行かんとするの再夕、復た見る可からず」と。

【⑧】（『鶯鶯伝』の「不數月、張生復游於蒲」から「趣歸鄭所、遂不復至」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

碧沼鴛鴦交頸舞。正恁雙棲、又遣分飛去。酒翰贈言終不許。援琴請盡奴衷素。曲未成聲先怨慕。忍淚凝情、強作霓裳序。彈到離愁凄咽處。絃腸俱斷梨花雨。

碧沼（へきしやう）の鴛鴦（うんおう） 頸（くび）を交へて舞ふ。正（ただ）に恁（か）く双棲（しゆうせい）するに、又た分飛（ぶんひ）して去ら遣（し）む。翰（か）を洒（そそ）ぎ言（ことば）を贈（たま）るも終（はつ）に許（ゆる）さざりしに、琴（きん）を授（と）り請（こ）ひ尽（つ）くす奴（やつ）の衷（ちゆう）素（そ）。曲未（きよくみ）だ声（こゑ）を成（な）さざるに先（まづ）ず怨慕（おんぼ）す。涙（なみだ）を忍（しの）び情（なさけ）を凝（こ）らして、強（し）ひて霓裳（げいしよう）の序（しり）を作（な）す。彈（ひ）きて離愁（りしゆう）凄咽（せいえん）の処（ところ）へ到（いた）れば、絃腸（せんちゆう）俱（とも）に断（と）ゆ 梨花（りか）の雨（あめ）。

【通釈】みどりの沼の鴛鴦が頸を交えて睦み合う、正にそのようにして二人は（再び）共に暮らしていたものを、また（科挙の受験が）離れ離れに飛び去らせ、二人は離別することに。筆をとり言葉をささげて願っても最後まで拒み続けた鴛鴦が、（別れに臨んで）琴をとり、（演奏しつつ）何もかも（張生に）願ひ出たその真情。曲がまだしつかりとは始まらぬうちから、真つ先に（張生を）怨みつつも慕う気持ち溢れ出る。涙をこらえ気持ちを抑えて無理矢理に霓裳羽衣の序を演奏したが、曲を奏でて離別を愁い悲しみ咽ぶ箇所まで来ると、（鴛鴦は）悲嘆極まり涙に暮れて琴の音も絶えてしまったが、（その姿はまるで）白い梨の花が雨を帯びているかに美しい。

【語釈】

〔鴛鴦交頸舞〕：「鴛鴦」は、おしどり。雌雄の仲睦まじく、樹上において朝夕頸を交えて親しみ合うとされた。夫婦や男女の仲が睦まじい喩え。例えば、唐・李景亮『李章武伝』に、美人との別れに臨んで「章武は交頸鴛鴦綺一端を留め、仍つて詩を贈りて曰く、鴛鴦綺、知んぬ、結ぶこと幾千糸ぞ。別後交頸を尋むれば、応に未だ別れざりし時を傷むべし」と。『鶯鶯伝』の「続会真詩」に「鴛鴦頸を交へて舞ひ、翡翠斂を合せて籠る」と。
〔双棲〕：雌雄が共に棲む。夫婦男女が睦まじく同居して離れない喩え。同棲。例えば魏・曹植の「種葛篇」に「下に頸を交ふる獸有り、仰ぎて双び棲む禽を見る」と。

〔分飛〕…離別する。(東西に)分かれ分かれになる。『芸文類聚』卷四三「歌」に引く「古東飛伯勞歌」に「東飛の伯勞、西飛の燕、黃姑織女、時に相見る」とあるにもとづく。「伯勞」は、もず。「黃姑」は、牽牛星。「鶯鶯傳」に「張生俄かに文を以て調せらる。期に及んで、又た当に西に去るべし」と。

〔洒翰贈言終不許〕…「洒翰」は、筆を揮つて字を書く。「洒」は、そそぐ。「翰」は、ふで。「灑翰」に同じ。『鶯鶯傳』に「崔氏…善く文を属す。(張生)求索すること再三なれども、終に見る可からず。往往張生自ら文を以て挑むも、亦た甚だしくは(張の文章を)觀覽せず。…張を待つつの意甚だ厚けれども、然れども未だ嘗て詞を以て之に継がず」と。

〔奴〕…女性の自称。ここでは、鶯鶯を指す。例えば、金・董解元『西廂記諸宮調』卷二に「若し奴一箇を惜しめば、大禍三条有らん」と。

〔衷素〕…心の内の真情。例えば、『全唐五代詞』卷四、南唐・李煜の「菩薩蠻」詞・其の三に「雨と雲とは繡戸に深く、未だ衷素を諧ふるに便ならず」と。『鶯鶯傳』の崔氏の科白に「君常に我善く琴を鼓すと謂ふ。…且に往かんとす、君に此の誠を既さんと。」

〔曲未成声先怨慕〕…「怨慕」は、逢えないことを怨みながらも相手を慕う気持ち。『鶯鶯傳』に「(崔氏は)往往章句を沈吟し、怨慕する者之を久しくす」と。また、当該場面に「困つて命じて琴を払ひ、霓裳羽衣の序を鼓す。数声ならざるに、哀音怨乱、復た其の是の曲なるを知らざるなり」と。

〔霓裳序〕…「霓裳」は、「霓裳羽衣曲」のこと。玄宗皇帝が愛好したこととで有名な盛唐の英華を象徴する舞曲。「長恨歌」に「漁陽の鞞鼓、地を動して来り、驚破す霓裳羽衣の曲」と。この舞曲は「散序」「中序」「破」の三部から構成され、ここにいう「序」とは「散序」を指すと思われる。白居易の「霓裳羽衣歌」に「散序 六奏

未だ衣を動かさず、陽台の宿雲 慵もつろくして飛ばず」と。しかし、該詞にいう「離愁凄咽の処」が、やはりこの「散序」の一部を指すのかは不明。この舞曲は元來、宮中で大規模に演奏されたものであったが、中唐以降は、士大夫が私的な宴席の場などで妓女らに演奏させることが増え、その過程で演奏形式も簡略化されたようである。詳しくは、村上哲見「霓裳羽衣曲考」『宋詞研究 唐五代北宋篇』（一九七六年・創文社）を参照。「鶯鶯伝」に「因つて命じて琴を抚ひ、霓裳羽衣の序を鼓す」と。

〔彈到離愁凄咽処〕：「凄咽」は、悲しく鳴咽するような音声の形容。関連箇所として、『鶯鶯伝』に「崔氏」異時独り夜琴よを操り、愁弄悽惻す」と。該詞では、「霓裳羽衣の序」そのものに「離愁凄咽の処」があり、そこまで「弾き到了」と書いているが、『鶯鶯伝』は「数声ならざるに、哀音怨乱、復た其の是の曲なるを知らざるなり」と表現しており、微妙な差異を見せる。

〔絃腸俱断〕：「断腸」は、腸が断ち切れるほどの想い。極度の悲しみや思慕の情をいう。『世説新語』黜免篇の故事にもとづく。また、李白の「清平調詞」其二に「一枝の紅艷 露 香を凝らす、雲雨巫山 枉むだしく断腸」と。〔梨花雨〕：美人が涙を流している形容。「長恨歌」に仙界の楊貴妃が涙を流すさまを「玉容寂寞として淚闌干、梨花一枝春雨を帶ぶ」と。『鶯鶯伝』に「崔も亦た遽よかに之を止めて琴を投ず。泣下りて流連、趨はりて鄭の所に帰り、遂に復た至らず」と。

〔⑨〕『鶯鶯伝』の「詰且、張生遂行」から「情不能申、千萬珍重」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

別後相思心目亂。不謂芳音、忽寄南來鴈。却寫花箋和淚卷、細書方寸教伊看。獨寐良宵無計遣。夢裏依稀、暫若尋常見。幽會未終魂已斷。半衾如燠人猶遠。

別後 相ひ思ふて心目乱る。謂はざりき 芳音、忽ち南來の鴈に寄せんとは。却つて花箋に写して涙に和して巻き、方寸を細書して伊をして看しむ。独り良宵に寐ねては遣すに計無く、夢裏 依稀として、暫らく尋常に見ふが若し。幽会未だ終らざるに 魂已に断え、半衾は暖かなるが如きも 人は猶ほ遠し。

【通釈】別れて以後の鶯鶯は、張生を恋慕つて心を乱しながら暮らしていた。(そこへ) 思いがけずも南方長安の方角から飛び來つた鴈にことづけて突然張生が手紙を寄越そうとは。逆に彼女は美しい便箋に認めて返書とし涙と共に封をして、思いの文を委細詳しく書き綴り、(都の) 彼に読ませたのだ。(その手紙には) 「あれから良夜に独り寝て胸の悶えを晴らす術もなく、夢の中ではまざまざと、あなたと昔さながらにしばらくお会いしていても、夢での逢瀬が終わらぬうちに、悲しみ極まつて夢は覚め、ふとんの片方は暖かいように感じましても、やはりあなたは遠い都に離れておいでなのです」と。

【語釈】

〔別後相思心目乱〕：「相思」は、恋慕う。「心目」は、内心。心の中。「鶯鶯伝」では、張生と別れた後の、自身の様子をしたためた鶯鶯の手紙に「去秋より已來、常に忽忽として失ふ所有るが如し。諠譁の下に於いては、或いは勉めて語笑を為すも、閒宵自ら処りては、涙零ちざるは無し」と。

〔不謂芳音、忽寄南來鴈〕：「芳音」は、立派な詞章。都の張生が鶯鶯に出した手紙を指す。「鴈」は、次の故事によつて手紙をはこぶ使者とされた。『漢書』卷五四、蘇武伝に「(漢の) 使者を教て單于に謂ひて、天子上林中に射するに、雁を得、足に帛書の係る有りて、(蘇) 武等某沢の中に在りと言う、と言はしむ」と。『鶯鶯伝』

に「明年文戰勝たず、張遂に京に止まり、因つて書を崔に貽り、以て其の意を広くす」と。

〔却写花箋和淚卷、細書方寸教伊看〕：「花箋」は、模様入りの美しい便箋。「方寸」は、心のこと。ここでは、心情。おもい。「伊」は、三人称の指示語。かれ。「鶯鶯伝」は単に「崔氏緘して之に報す」とし、鶯鶯の手紙を載せる。

〔独寐良宵無計遣〕：「遣」は、気持ちをはらす。「鶯鶯伝」に「閒宵自ら処りては、涙零ちざるは無し」と。

〔夢裏依稀、暫若尋常見〕：「依稀」は、さながら。あたかも。「尋常」は、平常。普通。「鶯鶯伝」に「乃ち夢寐の間に至るも、亦た感咽離憂の思ひ多く、網繆繆繆、暫く尋常の若し」と。

〔幽会未終魂已断〕：「幽会」は、ふつう「男女の密会」をいうが、ここは「夢の中の逢瀬」の意。「魂断」は、「断魂」に同じく、極度の悲しみの表現。同時に、夢の中での魂による再会が途絶えたことをいう。「鶯鶯伝」に「幽会未だ終らざるに、驚魂已に断ゆ」と。

〔半衾如煖人猶遠〕：「衾」は、掛けぶとん。「鶯鶯伝」に「半衾暖かなるが如しと雖も、之（張生）を思へば甚だ遙かなり」と。

〔10〕〔鶯鶯伝〕の「玉環一枚」から「母以鄙爲深念也」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

尺素重重封錦字。未盡幽閨、別後心中事。珮玉綵絲文竹器、願君一見深知意。環玉長圓絲萬繫、竹上爛斑、總是相思淚。物會見郎人永棄、心馳魂去神千里。

尺素重重 錦字を封ずるも、未だ尽くさず 幽閨の、別後の心中の事を。珮玉 綵糸 文竹の器、願はくは 君

一見して深く意を知らんことを。環玉は長円に糸は万繫。竹上の爛斑は、絵て是れ相思の涙。物は会はず郎に見ふも人は永く棄てらる、心は馳せ魂は去きて神千里ならん。

【通釈】(鶯鶯は)手紙に縷々と認めて美しき恋の封書としたものの、奥深い闇の中で、(自分が)別後に思つた事どもをなお全て言い尽くせたわけではなかつた。(そこで)佩び玉と色糸、斑模様の竹の器をもに贈り、張生が(これらを)一目見て、(鶯鶯の)気持ちをしつかりと理解してくれらることを願つたのだ。まるい玉には永遠の恋の団円の願いを込め、愛の思いは糸のように万事にあなたを離れない。竹に置きたる斑点は、全てあなたを慕つて泣いた、涙の痕に他ならぬ。これらの物は必ずやあなた様と会えるのに、私は永久に棄てられようとは。(我が)心と魂は(強い恋慕にあこがれ出でて)あなたの元へと千里を越えて馳せ行くでしょう。

【語釈】

〔尺素〕…てがみ。書信。「素」は、絹。昔、手紙は絹に書いたのでいう。

〔重重〕…幾重にもかさなるさま。濃密に縷々思いを綴るさま。

〔錦字〕…妻が夫を慕つておくる手紙。ここは、鶯鶯が都の張生にあてた長文の手紙を指す。出典は、前秦・竇滔の妻蘇氏が廻文詩を錦に織り込んで夫に贈つた故事。『晋書』卷九六・列女伝に「竇滔の妻蘇氏……善く文を属す。滔、符堅の時秦州刺史と為り、流沙に徙さる。蘇氏之を思ひ、織錦もて迴文旋図の詩を為り以て滔に贈る。宛転として循環して以て之を読めば、詞甚だ懐惋、凡そ八百四十字」と。

〔幽闇〕…奥深いねや。多く婦女の寢室をいう。

〔珮玉〕…帯にかけて飾りとする玉。帯び玉。『鶯鶯伝』に「玉環一枚、是れ児嬰の年より弄せし所、寄せて君子下体の佩ぶる所に充つ」と。

〔綵糸文竹器〕…「綵糸」は、色のついた糸。「文竹」は、斑竹。まだら模様の竹。『鶯鶯伝』に「兼ねて乱糸一綯、文竹の茶碾子一枚、此の数物は珍とせらるるに足らず」と。

〔環玉長円〕…『鶯鶯伝』に「玉は其の堅潤にして渝らざるに取り、環は其の終始絶えざるに取る。……意者に玉の如きの真あり、弊志環の如く解けざらんことを欲す」と。

〔糸萬繫〕…『鶯鶯伝』に「愁緒糸に繫ふ」と。

〔竹上爛斑、綵是相思涙〕…「爛斑」は、あや模様が入り混じっているさま。「相思涙」は、恋人を慕ってながす涙。

堯の女、舜の妃の娥皇・女英が舜の崩御を聞いて流した涙が竹にそそぎ斑紋をなした故事をふまえる。晋・張華『博物誌』卷八・史補に「堯の二女、舜の二妃を湘夫人と曰ふ。舜崩じ、二妃啼きて、涕を以て竹に揮へば、竹尽く斑す」と。『全唐詩』卷六一一、皮日休の「石榴歌」に「玉刻の冰壺 露を含みて湿ひ、爛斑帯ぶるに似たり 湘娥の泣」と。『鶯鶯伝』に「涙痕竹に在り」と。

〔物会见郎〕…『鶯鶯伝』に「物に因つて情を達し、永く以て好と為さんのみ」と。

〔人永棄〕…『鶯鶯伝』に「心は廻く身は退し、拜会期無からん」と。

〔神千里〕…遠く離れていても心は通じ合うこと。唐・孟棻『本事詩』微異に引く元稹と白居易の逸話が有名。「元相公積 御史と為りて梓潼（四川省）に鞠獄（罪を裁くこと）す。時に白尚書（居易）京に在り、名輩と慈恩（寺）に遊び、花下に小酌し、詩を為りて元に寄せて曰く……。時に元果して褒城に及び、亦た夢遊の詩を寄せて曰く……。千里神交すること、合に符契（わりふ）の若し、友朋の道、至るを期せざらん歟」と。

【⑩】〔鶯鶯伝〕の「張之友聞之」から「憐取眼前人」まで）奉勞歌伴、再和前聲。

夢覺高唐雲雨散。十二巫峯、隔斷相思眼。不爲旁人移步懶、爲郎憔悴羞郎見。青翼不來孤鳳怨。路失桃源、再會終無便。舊恨新愁無計遣、情深何似情俱淺。

夢は高唐に覺めて雲雨散じ、十二巫峯、隔斷す 相思の眼。旁人の爲に歩を移すに懶きにあらず、郎が爲に憔悴して郎に見ふを羞づ。青翼来らずして孤鳳怨む。路は桃源に失はれて、再会 終に便なし。旧恨新愁 遣すに計無し、情深くして何ぞ似る 情の俱に淺きに。

【通釈】あの高唐での夢が覺め雲雨の契りも散じ消えたかのように二人の恋も絶え果てて、(鶯鶯は今や他に嫁ぎ、あの神女が帰った) 巫山の十二峰のように遙かな存在、彼女を想つて涙を流しても隔てる距離はあまりに遠い。(張生が再会を望んでも返書には)「連れ合いを氣にして(あなたの前に) 歩いて行けぬのではありません。あなたを想うあまりにやつれたこの姿を見られることが恥ずかしいのです」と。(こうして、再会の) 吉報をはこぶ青い鳥は飛んで来てはくれず、孤独な鳳鳥(＝張生)は(鶯鶯を) 怨むこととなったのだ。(仙女(鶯鶯)の住まう) 桃源へと続く恋の路は失われ、再会をはたす方法は全く消え果てた。旧い恨みと新しい愁い、(これらを) 晴らす術もない。(二人の) 恋情は深いものなのに、どうして共に薄情であるかのように振る舞ったのであろうか。

【語釈】

〔夢覺高唐雲雨散〕…昔、楚の懷王が昼寝の夢の中で巫山の神女と契つた故事〔文選〕卷一九、宋玉「高唐の賦」

序)をふまえる。【⑦】の【語釈】を参照。

〔十二巫峯、隔斷相思眼〕：「十二巫峯」は、四川省にある巫山の十二峰。楚の懷王との夢の契りの後、巫山の神女が帰っていった場所。ここでは下の句と呼応して、恋人であった崔氏が他人へ嫁ぎ、遙かに遠い存在となつてしまつたことをあらわす。

〔不為旁人移步懶、為郎憔悴羞郎見〕：「旁人」は、かたわらの人。ここでは、崔氏の夫となつた男性を指す。「憔悴」は、やせ衰える。この二句は、『鶯鶯伝』で崔氏が詠じた詩句「旁人の為に羞ぢて起たざるにあらす、郎の為に憔悴して却つて郎を羞づ(不為旁人羞不起、為郎憔悴却羞郎)」を、ほぼそのまま用いた表現。

〔青翼〕：「青鸞」に同じ。青鳥のこと。西王母のために食を取つたという三本足の鳥。便りをもたらず使者をいう。【③】の【語釈】を参照。また【④】に「青鸞驀然として来りて喜びを報ず」と。ここでは特に「吉報をもたらず使者」の意。

〔孤鳳怨〕：「孤鳳」は、「鳳」(崔氏)と別離した「鳳」(張生)の意。「鳳凰」は、古代中国で尊ばれた想像上の瑞鳥。「鳳」が、雄、「凰」が、雌。『鶯鶯伝』に「夫之に語ぐれども、崔終に出づることを為さず。張の怨念の誠、顔色に動く」と。

〔路失桃源〕：「桃源路」は、美女のすむ仙境へと通じる路。後漢の劉晨・阮肇が天台山で葉を採つて路に迷い、やがて桃源洞に入つて二人の仙女と遇つた故事(南朝宋・劉義慶『幽冥録』に拠る。ここは、崔氏と再会する方途が絶たれたことをいう。【⑤】に「紅影牆を圧して花密なる処、花陰は便ち是れ桃源の路なり」と。

〔再会終無便〕：『鶯鶯伝』に「是れ自ら絶えて復た知らず」と。「青翼不來孤鳳怨、路失桃源、再会終無便」の箇所は、先の【④】【⑤】と呼応して、全体をまとめ収束させる表現。

〔旧恨新愁〕…昔や今に対するうらみやうれい。極めて深いうらみやうれいをいう。唐・韓偓の「三月」詩に「新愁旧恨 真に奈ともする無く、須らく鄰家の甕底に就きて眠るべし」と。

【散文】

逍遙子曰「樂天謂微之能道人意中語。」僕於是益知樂天之言爲當也。何者。夫崔之才華婉美、詞彩艷麗、則於所載絨書詩章盡之矣。如其都愉淫冶之態、則不可得而見。及觀其文、飄飄然彷彿出於人目前、雖丹青摹寫其形狀、未知能如是工且至否。僕嘗採摭其意、撰成鼓子詞十章、示余友河東白先生。先生曰「文則美矣、意猶有不盡者、胡不復爲一章於其後、具道張之與崔既不能以理定其情、又不能合之於義。始相遇也、如是之篤、終相失也、如是之遽。必及於此則完矣。」余應之曰「先生眞爲文者也。言必欲有終始、箴戒而後已。大抵鄙靡之詞、止歌其事之可歌、不必如是之備。若夫聚散離合、亦人之常情、古今所共惜也。又況崔之始相得而終至相失、豈得已哉。如崔已他適、而張詭計以求見、崔知張之意、而潛賦詩以謝之、其情蓋有未能忘者矣。樂天曰『天長地久有時盡、此恨綿綿無盡期。』豈獨在彼者耶。」予因命此意、復成一曲、綴於傳末云。

逍遙子曰く「樂天謂ふ、微之は能く人の意中の語を道ふ、と」と。僕是に於いて益す樂天の言の當爲るを知るなり。何ぞや。夫れ崔の才華婉美にして、詞彩艷麗なること、則ち載する所の絨書・詩章に之を尽くせり。都て淫冶を愉しむの態に如其りては、則ち得て見るべからず。其の文を觀るに及べば、飄飄然として人の目前に出づるに彷彿として、丹青もて其の形狀を模写すると雖も、未だ能く是くの如く工みにして且つ至れるや否やを知らず。僕嘗て其の意を採摭し、鼓子詞十章を撰成し、余が友河東の白先生に示す。先生曰く「文は則ち美なり、意は猶ほ尽くさざる

者有り。胡なまぞ復た一章を其の後に為りて、具ぶさに張と崔と、既に理を以て其の情を定むる能はず、又た之を義に合すること能はざれば、始め相ひ遇ふや、是くの如く篤あつきも、終りに相ひ失ふや、是くの如く遽にわかなるを道はざる。必ず此に及べば、則ち完まったし」と。余之に応へて曰く「先生は真に文を為る者なり。言には必ず終始有り、箴しんが戒して後已まんと欲せり。大抵鄙靡の詞、其の事の歌ふべきを歌ふに止まり、必ずしも是くの如く備はらず。若夫聚散離合は、亦た人の常情、古今の共に惜しむ所なり。又た況んや崔の始め相ひ得て終りに相ひ失ふに至るは、豈に已むを得んや。崔已に他に適ゆき、而るに張詭計もて以て見ふを求め、崔は張の意を知りて、潜ひそかに詩を賦して以て之を謝するが如きは、其の情蓋し未だ忘るる能はざる者有り。樂天曰く「天長く地久しきも時有りて尽く、此の恨み綿綿として尽くる期無し」と。豈に独り彼の者に在るのみならんや」と。予因て此の意を命として、復た一曲を成し、伝末に綴りて云う。

【通釈】逍遙子によれば、「樂天（白居易）は『微之（元稹）は人が心の中で思っている言葉を言うのがうまい』といっている」と。私（趙令時）は今になってますます白樂天の言葉が当たっていることを理解するようになった。なぜであらうか。そもそも崔鶯鶯が、やさしい美しさをそなえた才女で、艶麗な詩文をつくることができたことは、『鶯鶯伝』に載せられている手紙や詩をみれば全て明らかである。（そこに）淫みだらで狎なれ狎なれしいことを愉しむようなそぶりなどは、全く見つけ出すことはできない。『鶯鶯伝』の文章を読んでみると、（まるで鶯鶯が）ふわふわとさながら目の前に現れ出てきたようで、絵の具を使つてその様子をまねて描いたとしても、この『鶯鶯伝』の文章ほど）巧みで且つ迫真の鶯鶯像ができあがるか疑わしいほどだ。私は以前『鶯鶯伝』の主意をひろい取つて、十章の鼓子詞として書き直し、我が友・河東の白先生に見せたところ、先生はこう言われた。「表現は、まあ美しいが、

内容はまだ足りない部分があるな。もう一章をこの後ろに付け加えて、張生と崔鶯鶯が正しいやり方(理)で結婚することができず、また、道理になかった恋愛ができなかったために、はじめに出会った時には、あのように熱心な真心があつたのに、最後、別れる際には、あのように唐突(な別れ)になつてしまつたのだ、ということ、詳しく述べたらいいではないか。必ずこの点に言及してこそ、完全なものになるね」と。私はこれに答えて言つた。「先生は眞の文章家でいらつしやる。言葉には首尾一貫性が必要であり、(文章は)戒めを示した後で終わるべきだと望んでおられるのだ。大抵、低俗な卑しい歌というものは、その出来事の歌つておもしろいところだけを歌うにとどまつて、必ずしも先生のお言葉のように完備されてはおりません。そもそも「出会いと別れ」は、人間の一般的な情理であつて、古今を通じて皆が惜しんできたものです。ましてや崔鶯鶯が、初めは張生の愛を手に入れていたのに、最後にはその愛を失うことになつたのは(これもまたその一例なのだから)どうして回避することなどできたでしょうか。崔鶯鶯がすでに他人に嫁いだ後、それにもかかわらず張生は策略を用いて会うことを求め、鶯鶯のほうも張生の気持ちを悟つて、こつそりと詩を書いて面会を謝絶した、というようなことから、二人ともその恋情を未だに忘れることができなかったのだと思われます。白楽天が〔長恨歌〕で「天長く地久しきも時有りて尽く、此の恨み(＝死別した楊貴妃への恋情)綿綿として尽くる期無し」といつているように、(別れた後も恋情を忘れられないのは)どうしてひとり張生(と鶯鶯)の場合だけでありましようか」と。そこで私はその点を主意として、さらに一曲を作り、伝の末尾に書き綴つて(次のように)述べてみた。

【語釈】

〔逍遙子〕：未詳。『宋人伝記資料索引』(台湾・鼎文書局)等によれば、「逍遙〇」の号を持つ人物としては、五代

の僧・無作のほか、北宋の潘闕・張直・李椿年などがいるが、詳細は不明。このうち潘闕には『逍遙集』（四庫全書）集部別集類・『知不足齋叢書』所収）の著がある。また、『宋史』卷二〇五・藝文志四に「逍遙子」内指通玄訣「三卷」、同卷二〇六・藝文志五に「逍遙子」鮮鶚經「三卷」とあり、後者には「姓名を知らず（不知姓名）」と注記する。

〔樂天謂微之能道人意中語〕：これに相当する言葉は、前掲した潘闕の『逍遙集』及び現存の『白氏文集』中には見えないようである。白詩中の関連表現としては「和答詩十首」序の「元・白ふたりの詩文は」共に其の意の太だ切にして理の太だ周なるを思ふ」等を挙げられようが、出典とは見なしがたい。但し、北宋末から南宋の文人・張戒（？—一六〇？）の『歲寒堂詩話』には、類似の表現が頻出する。例えば、上巻第一条（引用は、陳應鸞『歲寒堂詩話校箋』（二〇〇〇年・巴蜀書社）に拠る）に「元・白・張籍・王建の樂府は、専ら人の心中の事を道ひ得たるを以て工みと為す（元白・張籍・王建樂府、專以道得人心、中事為工）」と。また、第一四條には「元微之云う、人の心中の事を道ひ得、と。此れ固より白樂天の長処なり。然るに情意は太だ詳なるに失し、景物は太だ露なるに失す」とあり、この箇所が付された陳應鸞氏の注には、参考として「蝶恋花詞」の該句も引いている。しかし、これらの評語（上巻第六・一八・二三条にも見える）は、元・白の詩が饒舌に過ぎて、浅薄な詩風に墮していることを非難したもの（この点に関しては、川合康三「白俗」の検討）『白居易研究講座5』（勉誠社・一九九四年）・『終南山の変容』（研文出版・一九九九年）参照）であって、該句の主旨とは一致しない。しかし、張戒は、宣和六年（一一二四）の進士であり、その時趙令時（一〇五一—一三四）はまだ在世していたから、元・白詩の特徴が「能く人の意中の語を道ふ」点にあるとの認識は、「逍遙子」の創始であるかともかく、この当時、ある程度一般化していたものと思しい。

〔緘書詩章〕…「緘書」は、封をした手紙。封書。『鶯鶯伝』の後半で、崔氏が都の張生に宛てた長文の手紙を指す。

「詩章」は、崔氏が書いた詩篇。「明月三五夜」の詩、及び離別後の再会を謝絶した二首の詩があるが、ここでは主に後者を指すか。

〔淫冶〕…みだらでなまめかしい。淫蕩。

〔飄飄然〕…「風に吹かれて、ふわふわとさまようかのよう」の意。

〔彷彿〕…よく似ていること。

〔丹青〕…赤い色と青い色。転じて、絵画をいう。

〔摹写〕…まねてうつす。模写。

〔鼓子詞十章〕…「鼓子詞」は、宋代説唱文学の一種。鼓による演奏を伴ったのでいう。該作のほかに、北宋の歐陽脩が西湖の景物を詠じた『採桑子』（全十三章）が代表作としてしられる。「十章」は、〔②〕から〔⑩〕までを指す。『知不足齋叢書』『叢書集成初編』『筆記小説大観』『全宋词』などの諸本は「十章」を「十一章」に作るが、次に挙げた『序文』に鑑みて、孔凡札氏の校勘にしたがう。『序文』にいう「今暇日に、詳しく其の文を觀、其の煩褻を略し、之を分かちて十章と爲す。每章の下、之を属るに詞を以てす。或は全て其の文を撫ひ、或は其の意を取るに止まる。又た別に一曲を爲り、之を伝の前に載するは、先づ前篇の義を叙するなり」と。

〔①〕は、「先生」に「十章」を見せた後で追補されたものと思しい。

〔河東白先生〕…未詳。「河東」は、黄河の東。ほぼ今の山西省一带をいう。諸本の多くは「河東白先生」に作るが、孔凡札氏の校勘にしたがう。何れにせよ、『宋人伝記資料索引』などによっても該当する人物は不明。

〔定情〕…美しい宝飾品を贈って結婚のあかしとすること。転じて、結婚して夫婦となること。陳鴻の「長恨歌伝」

に「定情の夕べ、金釵・鈿合でんごうを授けて以て之を固くす」と。

〔箴戒〕 … いましめる。

〔鄙靡之詞〕 … 卑俗で柔弱な歌。下品で卑猥な歌。『鶯鶯伝』に「是これを用て鄙靡の詞、以て其の必ず至らんことを求めたり。非礼の動、能く心に媿はぢざらんや」と。

〔若夫〕 … 発話の語。文章や段落の始めに用いて、新しい話題を提示する。それ。それに。そもそも。

〔豈得已哉〕 … 反語。どうしてやめることができたであろうか（いや、できない）、の意。

〔詭計〕 … いつわりの計略。人をだますはかりごと。『鶯鶯伝』の末尾で、張生が「外兄いとこ」といつわつて、既に他人と結婚していた崔氏と再会しようとした行爲を指す。

〔其情蓋有未能忘者矣〕 … 関連の表現として、『鶯鶯伝』の冒頭部に、張生が自らを紹介して「大凡物おおよその尤なる者は、未だ嘗て心に留連せずんばあらず。是れ其の情を忘るる者に非ざるを知るなり」とある。

〔天長地久有時尽、此恨綿綿無尺期〕 … 「長恨歌」の末尾の二句。

〔因命此意〕 … 「命意」は、工夫する。また、作品の主意をいう。ここは「これが作品の主意となるよう工夫して」の意と解する。

⑫

鏡破人離何處問。路隔銀河、歲會知猶近。只道新來消瘦損、玉容不見空傳信。棄擲前歡俱未忍。豈料盟言、陡頓無憑準。地久天長終有盡、綿綿不似無窮恨。

鏡破れ人離れて何れの処にか問はん。路は銀河を隔てて、歳会の猶ほ近きを知る。只だ道ふ 新来消瘦して損ふと。玉容見へず空しく信を伝ふ。前歡を棄擲して俱に未だ忍びず。豈に料らんや 盟言の、陡頓かに憑準無きとは。地久しく天長きも終に尽くること有り、綿綿たること似ず 無窮の恨みに。

【通釈】鏡が割れるように恋は破れ二人は離別してもう会える場所もない。二人を隔てる路はあたかも銀河のよう（に遙か）、年に一度の（牽牛織女の）逢瀬も（二人の距離に比べたら）なお近いもの。（鶯鶯は）ただ「このところ（あなたを想つて）やせ細り、昔の面影はもうありません」というばかり。美しい姿を見せることもなく人づてに手紙を寄越すだけであった。昔の逢瀬の歎びを擲ち棄てたその後、二人はともに恋慕の情を禁ずることはできなかつたのだ。どうして予想できたであろうか、変わらぬ愛を誓つた言葉が、こんなにも突然はかないものにならうとは。かの永遠の天地でも終にはおわりが来るといふ、いつまでも尽きない点で比べたら、（天地ですらも）無限に続く恋の恨みには及ばないのだ。

【語釈】

〔鏡破〕…夫婦や恋人が離別することの喩え。『太平御覽』卷七一七に引く漢・東方朔『神異經』に「昔夫婦の將に別れんとする有り、鏡を破り、人半を執りて信と為す」と。

〔銀河〕…天の川のこと。「銀漢」「天河」ともいふ。

〔歳会〕…一年に一度会うこと。七月七日の牽牛と織女の逢瀬をいふ。

〔消瘦損〕…「消瘦」「瘦損」はともに、やせてやつれること。『鶯鶯伝』末尾の崔氏の詩に「消瘦してより容光を減

ず」と。

〔玉容〕…女性の美しい容貌。玉姿。「長恨歌」に仙界の楊貴妃を形容して「玉容寂寞として淚闌干、梨花一枝春
雨を帯ぶ」と。

〔陡頓〕…にはかに。俄然。突然。

〔憑準〕…確かな拠り所。

〔地久天長終有尽、綿綿不似無窮恨〕…「長恨歌」の末尾に「天長く地久しきも時有りて尽く、此の恨み綿綿として
尽くる期無し（天長地久有時尽、此恨綿綿無^と尽期）」と。

（付記）本稿は平成十六年度科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。